2025年3月2日　説教「青年よ。起きなさい」

ルカの福音書7章11〜17節

前回は7章1〜11節を通して、百人隊長の信仰について学びました。彼は離れたところにいるイエスに使いを送り、「おことばをください。そうすれば、私のしもべは必ずいやされます」と伝えました。その信仰をイエス・キリストは驚かれたのでした。今朝はそれに続きます。

1．死んで担ぎだされた青年（11〜12節）

①ナインという町に（11）**「それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちと大ぜいの人の群れがいっしょに行った。」**

百人隊長の出来事から「間もなく」とありますが、数日後でありましょうか。イエスはナインという町に入りました。そこは、カペナウムからは南西に40キロほど南西の所で、ほぼ歩いて一日の距離です。ヘルモン山の北西山麓にありました。聖書では、この箇所だけに出て来る町ですが、当時はそれなりに重要な町であったことが遺跡などから伺えるとのことです。

②やもめの一人息子（12）**「イエスが町の門に近づかれると、やもめとなった母親のひとり息子が、死んでかつぎ出されるところであった。」**

ナインの町に外敵から守るための城壁があったのかはわかりせんが、ここには門があったことがわかります。イエスはカペナウムから通商路を通って、南にくだり、ナインの町の門に近づかれました。するとちょうど、亡くなった青年の棺が、葬りのために町の外の墓場にかつぎ出されるところでした。青年の母親はやもめであったことが記されていますが、夫を失ったうえに、愛する一人息子を失って失意のなかにあったと思われます。

③大勢が母親に付き添い（12）**「町の人たちが大ぜいその母親に付き添っていた。」**

どこの国でも人の情には共通するものがあります。家族の死は耐えがたいです。それも希望の光であった一人息子を失ったやもめの姿は、誰からも同情を買う様子であったでしょう。ナインの町の人たちは、親戚だけでなく、近隣の人々など、多くの人々が彼女を慰めるために、ある者は見送り、ある者は墓地まで一緒に向かおうとしていました。

2．息子を失った母、生き返らされた青年（13〜15節）

①かわいそうと思われた主（13）**「主はその母親を見てかわいそうに思い『泣かなくても良い』と言われた。」**

イエスはその母親の様子をみて、かわいそうに思われました。「かわいそうに思い」という言葉は、「憐みをかけ」と言い換えられます。そして、声をかけてくださいました。「泣かなくても良いのですよ」と。泣くしかない母親に対して、泣かなくてよいと、普通なら言えません。反発されることでしょう。しかし、イエスさまに言われる少し違います。希望が湧いてきます。

②棺に手を掛けられて（14）**「そして近寄って棺に手をかけられると、かついでいる人たちが立ち止まったので、『青年よ。あなたに言う、起きなさい』と言われた。」**

イエスは担がれている棺の所まで行き、手をかけられました。担いでいる人達はなんだろうと、立ち止まります。その時に、イエスはお言葉を言われました。「青年よ、あなたに言う、起きなさい」。説教題には「あなたに言う」を省きましたが、響いてくるお言葉です。他でもない、若者よ、棺に入っているあなたに言っているのですよと確認された上で、「起きなさい」とご命令されています。屋根から吊り下げられた中風の人も「起きなさい」と言われましたが（5:24）、今回の場合は既に亡くなった人へのお言葉でした。

③起き上がった青年（15）**「すると、その死人が起き上がって、ものを言い始めたので、イエスは彼を母親に返された。」**

イエスのお言葉を戴いた死人であった若者は、その通りに起き上がったのです。そして、それは人格抜きで体だけ起き上がらせられたのではなく、話し始めたというのです。人間にとって話すということは、コミュニケーションはもちろん日常生活においても、様々な仕事を行うことにおいても、また知的活動においても不可欠な神から与えられた賜物です。彼はまさに生き返ったのです。そして、少し前まで悲しみに沈んでいた母親に返されたのです。泣かなくてよいと主が言われたのは、本当だったのです。

３．イエスのことが広まり（16～17 節）

①恐れをいだき（16）**「人々は恐れを抱き、『大預言者が私たちのうちに現れた』とか『神がその民を顧みてくださった』などと言って、神をあがめた。」**

イエス・キリストによる甦らせの出来事に遭遇した、青年の母親、親戚、ナインの町の人々は心に恐れを抱きました。かつて、モーセが神の山ホレブに来て、燃える柴を見させられ、その柴の中から「モーセ、モーセ」と言われる主のお言葉を聞いた時に、「ここにおります」と答え、神が「ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は聖なる地である」と言われ、主なる神であることを告げられたことを聞いたとき、神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した（出エジプト 3:1-6）とあります。あのモーセが抱いた恐れに似た思いを人々は抱いたのです。そして、イエスを大預言者だと言い、神の大いなる顧みを覚えて、神を崇めたのでした。

②広まったイエスのこと（17）**「イエスについてこの話がユダヤ全土と回りの地方一帯に広まった。」**

この話はガリラヤだけでなく、ユダヤ全土及び、周りのサマリヤやシリヤなどの地方にも伝わっていきました。この時点で、人々はまだイエスがどのような存在なのかはわかりませんでしたが、死んだ人をも生き返らせる方というニュースが広まっていたのです。

《結論》　今朝の聖書箇所から三つのことを学びたいと思います。

その第一は、青年の母親への慰めについてです。ある現代日本の 40 代の女性。子供を亡くし、辛く苦しく哀しみのなかにあり、消えてしまいたい思うこともあるそうだ。それは同じ経験をした人でなければわからないと述べています。そうした母たちの集まりもあるということですが、余人の知ることができない苦しさを分かち合える場所なのでしょう。ナインの女性も、若い息子が亡くなり失意のなかにありました。そんな時に、周りの者たちも同情して付き添ってくれました。とはいえ、多くの慰めの言葉というのは、なかなか当事者の心には届かないでしょう。子どもたちを失ったヨブに対して、友人のエリファズが「さあ、思い出せ。だれか罪がないのに滅びた者があるか」（ヨブ 4:7）と、その不幸をヨブの罪の故だと責め、ヨブを苦しめました。ここで、その心がいえない母親と出会ったイエス・キリストは母親をかわいそうに思い、「泣かなくてよい」と言われました。彼女にとっては安らぎと慰めとなる一言でした。真の慰め主はイエス・キリストのみです。

第二に、この青年の生き返りのことについてです。ルカの福音書は 8 章には会堂管理者ヤイロの娘の死からの回復の記事があり、ヨハネの福音書 11 章にはベタニヤのマルタとマリヤの兄弟ラザロの蘇生の記事があります。これらの記事を彼らは失神していたのだ等と読むことは誤りで、死んでしまった人が生き返ったと素直に読むべきです。ここで、人々はこの出来事を見て、「大預言者だ」と言ったのは二人の預言者のことがあったからです。私達は 2022 年から 23 年にかけて列王記を学びました。そこに出て来た、一人が預言者エリヤです。彼はツァレファテの女の息子の生き返りに関わり（Ⅰ列王 17）ました。またもう一人は預言者エリシャです。彼もシュネムの女の子の生き返りに関わりました。彼らは、これらの奇蹟をいのちの造り主の御力によってなしました。しかし、ルカの福音書の生き返りの出来事は、イエス・キリスト御自身の御力でこれが成されたのです。キリストは十字架の死の後、復活された主なる神です。この方だからこの御業がなされたのです（Ⅰコリント 15 章）。復活の主に、私達のいのちをおまかせしましょう。

第三に、この青年への主のお言葉についてです。前回、7 章 1～10 節において、主のお言葉により、しもべが癒されると信じた百人隊長の信仰を学びました。キリストの御言葉には力がありました。今ここで、キリストは「青年よ。あなたに言う、起きなさい」と命ぜられました。すると、死んだ青年は起き上がったのです。ものを言い始めたのです。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」（ヨハネ 14:6）とイエス・キリストは言われましたが、いのちの主は、御言葉によって命をお与えになる権威をもっておられます。私達も「起きなさい」と言われる、主の御言葉を自分へのメッセージと受け取り、真っすぐに応じて立ち上がっていきましょう。青年だけではありません、何歳でもこの御言葉によって、立ち上がらせいただきましょう。

真の慰め主で、復活のいのちを与えくださる救い主イエスに委ね、その御言葉に従って立ち上がる力を備えてくださいますように。